

先妻・後妻

重吉の妻なりしいまのわが妻よ　ためらわずその墓に手を置け

良寛研究者で優れた歌人吉野秀雄の作。重吉とは三十歳で夭折した詩人の八木。八木二十五周忌に八木の妻だったとみ子と共に墓参し、人間を超えた人間愛漂う後妻へのいたわりの歌である。

吉野の先妻はつ子は敗戦直前四十二歳で、四人の子を遺して昇天。悲しみに耐えつつ死の床で言う。「あの世を信じない。でもこの世だけでよいの、幸福だった」と夫に感謝した。

夫は歌を返す。「よしえやし捺落迦なうかの火中はなかさぐるとも　再びなれ汝に逢はざらめはや」よしえやし（たとえ）お前が死後の世界はないと言おうと、わしがあの世を造つてそこでお前に、地獄の火の中をくぐっても逢いにいく。例をみない相聞歌。次の歌もまた…。

真命まいのちの極みにたえてししむらを　敢えてゆだねしわぎも子あはれ

これやこの一期いちごのいのちほひろ炎立ち　せよと迫りし吾妹わがもよ吾妹わがも

時代も時代。まして結核に苦しむ八木一家は悲惨を極めた。見かねた兄がその人柄を知ると、とみ子をお手伝いとして助けさす。とみ子四十歳。献身的な家事援助は当然父子を動かし、とみ子も感応、数年後昭和二十二年結婚。八木の先妻への愛も変わって
いない。

これの世に二人の妻と婚かひつれど　ふたりは我わがに一人なるのみ

末の子が母よ母よと呼ぶきけば　その亡き母の魂たまも浮うばむ

ここでは先妻後妻、先夫後夫も同一人として愛の崇高な姿を現している。前回記述の「先夫後夫」とはあまりにも対照的である。

(一九九六年九月二十六日)